

柏櫓丸航海日誌

〈vol.19〉
2019年春号

無料

【発行】注文・問合せ先
柏櫓丸（はくろしや）
札幌市中央区北2条西3丁目1
TEL 011-219-1211
FAX 011-219-1210
e-mail: eigyo@hakurosyoya.com
HP www.hakurosyoya.com

「柏櫓丸航海日誌」の
ご意見、ご感想をお待
ちしています。
上記までお寄せ下さい。

彼らの人生はその表情に、しわの一本一本に凝縮されている——
百年を生きた58人の北海道人に、ひとりのカメラマンが真摯に向き合い、作り上げた写真集

『百歳を超えた北海道人』2019年1月発売！



百歳を超えた北海道人
小森学 写真・文
2019年1月刊 / 3,500円（税別）

北海道に生まれ、百年を生きたすべての方に、
心からの敬意と感謝を捧げたい

一二歳の世界最高齢男性ほか、自転車乗り回し、畑を耕し、弓を引き、書をたしなみ、囲碁を打ち、コンサートを開く、百歳を超えていきいきと人生を謳歌する、五八人の北海道人の表情を切り取った写真集。

本書の撮影が始まったのは五年前だ。私も何度か撮影に同行させていた。最初の撮影は、当時一〇五歳の中村松蔵さんだった。去年まで自転車を乗り回していたと、笑顔をみせてくれた。札幌市役所に勤め札幌の礎を築いたお一人である石林清さん（当時一〇一歳）にもお会いした。お話ししているうちに、狸小路を整備したのも、さっぽろ雪まつりを始めたのも、大通公園を花でいっぱいにしたのも石林さんだということがわかり、驚いた。ライオンの出前をとって来て、一緒にご馳走になった。企画が始まった時、北海道には百歳を超える方が二四八八八（二〇一三年当時）いると聞いて、撮影は順調に進むだろうと思っていた。ところが、個人情報保護法が立ちふさがり、百歳の方々がどこにいらっしやるのか、まったく情報が集められず、撮影は難航した。

新聞に広告を掲載し、老人ホームなどに資料を送った。新聞やテレビの取材も受けて企画が紹介され、少しずつ連絡をしてくれる方が出てきた。そこから一人ずつ紹介の輪が広がっていった。五八名の方の写真を取り終えたときには、五年が経っていた。本書の撮影に協力していただいた方々の中には、一〇三歳で現役の住職さんや、オカリナコンサートを開く方、囲碁で一級取得を目指して頑張る方、弓道を続ける方などがいらっしやう。お元気に人生を謳歌している姿に、企画段階の時に私が持っていた百歳の方々に対するイメージがまったく払拭されてしまった。世界最高齢男性の野中正造さん（撮影当時一一二歳）も掲載されている。ある施設での撮影に同行したときは、忘れられない。痴呆で耳も遠い方で、意思疎通は難しいので

は、と思っていた。しかし、小森さんが耳元で大きな声で話しかけながら撮影を続けていくうちに、彼女の目に力が戻ってきた。そして撮影が終了しても、小森さんの手を握ってしばらく離そうとしなかった。百歳を超える方々に、感謝と敬意を込めて撮影を続けてきた小森さんの姿勢が伝わった瞬間だった。

北海道と命名されてから、今年で百五十年。その三分の二、明治、大正、昭和を生きた、北海道の歴史を作った人たちだ。そのような彼らから小森さんは丁寧に話を聞き、人生に寄り添うように撮影をされてきた。

彼らの人生はその表情に、しわの一本一本に凝縮されている。ぜひ、一枚一枚の写真から、彼らの人生を追体験してみたい。撮影にご協力いただいたすべての方に、この場を借りて感謝したい。本当にありがとうございました。（編集担当 可知佳恵）

『百歳を超えた北海道人』発行記念写真展 開催決定！

日時 2019年1月26日（土）～2月7日（木）
10:00～19:00 ※最終日は18:00終了
場所 紀伊國屋書店札幌本店 2階ギャラリースペース
（札幌市中央区北5条西5-7 sapporo55）
みなさんのお来場をお待ちしています！

読売新聞北海道支社発刊60周年記念出版 北海道に、こんなすごい人がいた！



ほっかいどう先人探訪
北の歴史を彩った53人
読売新聞北海道支社編集部 編
2019年1月刊 / 1,800円（税別）

歴史上の人物から人気作家にスポーツ選手、知られざる偉人まで、北海道の歴史を彩る53人を第一線の新聞記者が取材。全頁カラー写真入り。

日本列島本土を構成する四つの大きな島のうち、最も北にあるこの大地が「北海道」と名付けられてから、二〇一八年で百五十年を迎えました。この節目の年に、読売新聞は、北海道の歴史を彩った様々な人物を紹介する企画「先人探訪」を、一月一日から十月四日まで、足かけ十か月間にわたって北海道版に連載しました。取り上げた人物は、箱館戦争を戦った榎本武揚ら歴史上の人物から、昭和の大横綱大鵬や小説家の三浦綾子ら、二十一世紀を生きる私たちになじみのある方々まで計五十二人。本書では、それらに北海道の名



曙に咲く
蜂谷 涼 著
2018年11月刊 / 1,800円（税別）

北海道命名150年！ 明治期を舞台にした、蜂谷涼最新刊

北海道における畜産業発展に大きく貢献したエドウィン・ダンとその妻、鶴の愛の物語

本作は、北海道命名百五十年を記念して、北海道開拓に大きく貢献したエドウィン・ダンとその妻、鶴を描いた物語である。エドウィン・ダンは、彼と同じように、いわゆる御雇外国人であったクラーク博士やケプロンと比べると知名度が低いものの、北海道の畜産業がこれほど発展したのは、彼のおかげと言っても過言ではない。一方、彼の妻となる鶴は津軽の商家に生まれ、教育熱心な両親と双子の兄とともに何んも自由なく暮らしていた。しかし、やがて戊辰の役が終わり、母を病で失った

付け親、松浦武四郎を含めて五十三人を紹介しました。この連載には、最初から大きな壁が立ちました。この百五十年の間に活躍した北海道ゆかりの人物で、すでに鬼籍に入っている人、という条件でリストアップした結果、なんと四百人近くに達しました。

これらの中から、時代、ジャンル、ゆかりの地域、知名度などを考慮しながらバランスよく五十人程度を選ばなければなりません。下調べの段階で、その業績や波乱に富んだ生涯を詳しく知るにつけ、落とすにしのびないと頭を悩ませる日々が続きました。なぜ、あの人が取り上げられていないのだ、というお叱りを受けるかもしれないですが、泣く泣く絞り込んだ結果であることをご理解いただければ幸いです。

取材・執筆は北海道支社に所属する記者とカメラマンが担当しました。記事を書くにあたって、記者は必ずゆかりの地を訪ねました。そこで、先人たちの事績をしのび、そこに降り積もった時間に身を浸しました。時間が変えたもの、変えなかったものを感じ取り、先人が残したものが今どう生きているのかをつづりました。その人となりや業績を解説するの趣旨とする他の偉人伝と、本書が最も異なるのはその点です。豊富な写真も、先人たちが残したものでなく、先人の仕事を継ぐ意志や、遺産に学ぶ姿など、まさに「今」を切り取りました。写真を眺めているだけでも、先人たちの親近感が湧いてくるのではないでしようか。——本書「あとがき」より

（読売新聞北海道支社 専門委員 片岡正人）
鶴の写真は、真駒内にある「エドウィン・ダン記念館」に飾られていた。ところが昨年、写真の女性は別人であることが判明した。彼女に関する資料は少ないが、それらと照らし合わせると、本作で描かれているように、逆境にも負けないほどの強さと、どんな状況でも相手を思いやる優しさを持ち合わせた女性だったろうことがうかがえる。北海道発展のために全身全霊を捧げたエドウィン・ダン。時代の荒波に翻弄されながらも、家族や周囲の人々を愛し、一途な想いを貫いた鶴。一国の近代化が、つまるところ個人に始まり個人に終わるといえることがよくわかる。彼らの深い愛情とひたむきな想いには、胸を熱くさせられるにちがいない。（編集担当 青山万里子）